

德一教学への疑義

——『止観論』を中心として——

浅田 正博

最澄と徳一との間には弘仁五・六年頃より数次にわたつて一・三権実論争が展開されたことはあまりにも有名である。そこで今日における徳一教学の評価は、最澄に論戦をいどみ、十七部七十余巻の著作があつたという事由により、最澄と同等、もしくはそれ以上の教学大系を有していたと考えられているようである。しかるに小論では、徳一の『止観論』を研究することによつて、従来の徳一に対する評価に疑義を提示するものである。

まず『止観論』なる名称であるが、これは田村晃祐氏により名づけられた仮題（『伝教大師研究』所収「徳一著作考」七八二頁）であり、本題による著作は実在しない。周知のとおり最澄の『守護国界章』は徳一の『中辺義鏡』（現存せず）に対する反論である。故に『守護章』の中には『中辺義鏡』の引文が頻出するので、ある程度まで『中辺義鏡』を復元可能にしている。小論における『止観論』とは、この『中辺義鏡』所述の「止観」に関する徳一自身による所信表明部分を指すわけである。ところで最澄は『守護章』の中には『中辺義鏡』の長文引用を極力させているが『止観論』の部分のみは「大小交雜の難」と題して全文（全集本にて四〇頁）引用している。その最澄の前文に

所_レ示止観不_レ堪_二帰修_一。大小紛競_二次第雜乱_一。初分二十紙_ハ多分小乘行。後分五紙余多分菩薩行。交雜之失_{ナリ}段段無數。非_レ禪非_レ定都無_二次第_一。（伝教大師全集二、三二〇）

とあり、つづいて
任_二三目智臆_一。分_二別聖教_一。為_二三將具写_一。示_二多数学空損_一。為_二三當不_一具写_二後学懷_一疑。為_二三示邪分別_一。捨_二三十余紙_一。具写_二止観文略破停_一惡。披覽学生勿_レ嫌_二卷大_一也。（伝全集二、三二〇）

『止観論』全文引用の理由を述べている。これらは非常に手厳しい批判であるが、実に当を得た論評であることが論の内容調査により次第に明確化してきた。よつてその原由の考察を進めてみたいと思う。

さて本論の構成は大別して三門から成立している。第一門は「説止」で「止」に関する論述を六部に区分して示されている。第二門は「辨観」で四部分から「観」を弁じている。また第三門では「止観合説」と題し「止」と「観」をあわせ説いて十四に分説されている。ところで論全体を通じて出典の明記は三カ所のみである。最初は第一門第五の七作意相撰の文中に「故瑜伽云」とあり、つづく第六辨異名に「釈論解云」と記し、第三門第四明止観作意には「如瑜伽三十四説」とある。よつて本論は『瑜伽論』の影響下に撰せられたと、容易に想像がつく。ところが実際に両論を対校させれば出典明記部分は当然ながら、それ以外のほぼ全文にわたつても両者が合致するのである。要するに『止観論』は『瑜伽論』をハサミとノリでつぎはぎした書であると考えうる程である。今紙数の都合により両論を対照できずに残念であるが、その一好例を示すことにしよう。第三門第三辨止観障における二十種の障を列挙する中の第十

五番に、

十五、雖無此失、然有受用五失相応具、過失。五失相応具、
應知、如声聞地當說。(伝全集二、三二八)

とある。この文中の「声聞地」は何を示しているのか定かでない。

しかるにこの部分を『瑜伽論』に求めてみると、巻二十本地分中修所成地第十二の一文と合致し、しかもそれによると、「五失相応具」とは「修所成地」の次に説く「声聞地第十三」に詳説しているから参照せよ、との意にうけとめられるのである。よつて原文に帰つて初めて「声聞地」の意味が解せられるわけである。徳一はあまりに無造作に『瑜伽論』を切りつぎした明確な一証と言えるであらう。

次に『止観論』が前述の如き切りつぎによる作成であつたとしても『瑜伽論』に散説されている「止観」関係文を整然と大系づけているとすれば、徳一の業績と評価して良いであらう。しかるに両論対照によると、声聞地の部分と菩薩地の所説とが全くむやみに抄出されて混説されており、とうてい大系づけたとは考え得ない程、稚拙な構成となつている。というのは、『瑜伽論』では「声聞」の為に説く部分と「菩薩」の為に説く部分とが峻別されている。ところが『止観論』を『瑜伽論』にもどしてみた時、声聞地の文のすぐ後に菩薩地の文章を付加したり、菩薩地の文の後に声聞地の文が記されたりしており、その意味内容が全く不統一なのである。よつて徳一は俊別されているはずの修行内容を、混同して論を著わしたと考えざるを得ないのである。このことは修果において最も顕著に現われる。

「止観合説」の最後に「第十四辨「因定発通」の章がある。論の最後でもあり、全集本で五頁も費して詳論しているので、徳一も力を注いだ一段と思われる。ここには止観を修することによつて

「五神通」を得ると説いている。通仏教ではこの五通に漏尽通を加えて六神通を説くことは周知のことである。しかるに徳一は止観を修することによつて五通しか得ることができないと言うのである。そこでこの引文を『瑜伽論』に求めてみれば、本地分中声聞地所説部分であることが判明した。その前後部分を解説すれば次の如くなる。

清浄な心一境性を得た修行者は二道の岐路に立たされる。一道は世間道であり、他の一道は出世間道である。世間道へ往く行者は、外道・劣根性・異性・有学等の輩であり、後に二無心定を得て「五通を発す」と記されている。一方、出世間道へ往趣する行者は声聞の究竟果である阿羅漢果を得ると述べられている。声聞地における仏道修行者は当然のことながら阿羅漢果を求めることを目標とすべきである。しかるに徳一は「世間道往趣の行者」が得る「五通」の部分の抄出して『止観論』の最後部分に長々と記述したのである。徳一の止観によれば、修行過程は「声聞」と「菩薩」の混合であり、修果は「外道」の如き劣根性の者が得る「五神通」による色無色界の諸天の境地であるということになる。ここに至つて声聞や菩薩の説混同ばかりでなく、外道所説部分とも混用しており、不統一もはなはだしい暴論とも言える内容になつている。よつて最澄も引文当初にあつて、「所示止観不埒帰修。」と記した意も首肯できよう。

以上により、徳一の『止観論』は『瑜伽論』のつなぎあわせであり、しかもその構成内容たるや実にでたらめであるという結果が導き出せる。ところで如上のつまらない文章しか書くことのできなかった徳一の教学力は、最澄と同等に並び称せられてよいものであらうか。私は少なくともこの『止観論』を検討することにおいて、徳一の教学に疑義を抱かざるを得ないのである。